

九二 幕末志士の歌

(一)

皇政復古といふ高嶺を目標にして、之に攀ち登らうと志した幕末志士の面々は、まづ順序として其登り道に蟠居してゐる「討幕」といふ峻坂險路を、どうしても通過しなくてはならなかつた。しかもそれは幾百年間に涉つて、地盤の固まつた要害であり、荆棘を切り拓くべく、あまりに其地域が廣汎であつた。試みに之を日露の陸戦に看る、足一度旅順の戦蹟を述べたものは、彼の張り詰めた鐵條網を破つて、山嶮に登らうとすることの難易よりも、寧ろ其可能性の存在を期した乃木將軍の策謀に對して、まづ疑義を有つことが一般である。しかし忠勇の二字を冠する我が將兵は、幾萬戦友の屍を越えて進み、遂に爾靈山頂に翩翻と、燦たる日章旗は輝いたのである。

之を今日に在て、唯單に文章字句の末に見るのさへ、討幕といふ關門を踏破すること、如何

に難事であつたかが想像される。況や現實目睹の世界に、劍槍相撃ち彈丸飛注の間を往來するのである。東奔西走南船北馬、間道を傳ひ溪谷を渡り、森林橋梁を假宿とするなどは、實に志士日常の生活であつた。かくて彼等は「幕府」といふ鐵條網の直下に、或は戰鬪に刺客に、或は自刃に獄裏罹病に、横死したる幾多の同志を目送しつゝ、不屈不撓遂に會津戰爭といふ二百三高地に捷つて、茲にめでたく明治新政府は樹立された。さて過程を顧みれば、多年手を携へて同舟同車し來つた盟友、二十歳、三十歳の少壯を以て、長命の常人よりも幾倍の事績を擧げた盟友は、既にくゝ殉難者として、其夢寐にも忘れなかつた皇政復古の現實に接觸することなく、杳杳泉下に護國鬼となつて眠つてゐる、幸に生を明治に繋いだ面々にして、往時を追懷し感慨に耽らざるものはあるまい。

所謂「志士」の定義と其範圍に就ては、若干の疑義異論がないでもないが、こゝにはただ非幕府派の人々を以て之に充て、尙同志の烈女二三をも加ふることとした。

(11)

日本民族の特有せる高雅なる詩藻が、偶之を表現する機關として、最も端的に最も効果的な和歌といふ器を得、之を撰み之を利用するに至つたことは、まことに自然な好適な事象であ

つた。上古以來國風として、和歌はかくの如く發育し、かくの如く成長し、かくの如く成果を提ぐるに至つた。されば花晨月夕の雅遊に於ては勿論、兵馬倥傯の間に在ても武士の風懷は綽綽悠悠、これによつて多く、これによつて簡易に發露された。

明治維新の志士は、其階級出自公卿藩主以下、走卒に涉り商賈に及ぶと雖も、其大部分は文筆に疎ならず、所謂知識階級者であつた。従つて其所思を表示し、他面また之を遺懷の一端とすべく、古人に學び古例に倣ひ、此道を辿つたことは寧ろ當然であつた。況や當時新聞雜誌等の言論機關あるなく、公衆集議の會場のあつた譯ではない。そこで、深遠なる學識饒豊なる文才を有し、或は著述に或は詩文に、筆陣を張り蘊蓄を傾倒して、之を天下に問ふことを怠らなかつたものと雖も、尙且つ其附録として、少字數制限の簡易文學を以てするを便とし、詩歌吟詠を採用したのであつた。

日本人には衆愚尙且つ和歌を知る本來性がある。況や學的素質を多分に領有せる志士等が、其本格的に師承を有すると否とに拘らず、平易に歌道に入り、之を嗜み之を愛し之を作ることを得たの確決して不思議ではない。機に觸れ事に當つて琴線の高鳴るが本性である燕趙悲歌の士に對し、世情は其歌題歌材を提供すること餘りに豊富であつた。従つて彼等の歌は、強て技

巧を弄するの必要なく、ただ現實に即したものを詠めばよいのであつた。必然の結果として其詠風は常に白熱的であつて微溫的でなく、其巧拙を第二義に措き、朗朗之を吟ずれば實に懦夫をして起たしむるものがあり、其遺詠の世に喧傳せらるる所以、在て叙上の理由に基くものである。

(三)

志士の遺詠は、手稿遺墨等の断片的に残されたるものに據り、其歿後に於て、緣故者仰慕者等の手に、歌集として適當の題名を付し、刊行せられたる書が若干ある。今其一端を示さんに

姉小路公知 泣血集

岩倉具視 岩倉贈右大臣集

大國隆正 眞爾園翁歌集

菊池民子 倭文舍集

久坂玄瑞 江月齋遺集

月 照 露のくち葉

近衛忠勲 しとさくら

是枝貞至

(傳記中に所録)

佐久間象山

短冊集

佐久良東雄

櫻東雄歌集數種

三條實美

梨のかた枝

三條西季知

惠仁春の蔭

宍戸眞激

にほの浮巢

島津齊彬

順聖院君御詠草

田中綬猷

(傳記中に所録)

津崎短子

嵯峨野の花

富田基建

基竹草紙

伴林光平

家集

野村望東

向陵集

東久世通禧

竹廬舍歌集

平野國臣

平禁國臣歌集

古川 松根

檜の落葉

毛利 慶親

霞山集

眞木 保臣

紫籬遺稿

宮本 池臣

水言言葉の塵

山縣 有朋

椿山集

吉田 松陰

涙松集

井手 曙覽

志農夫廼舍集

等を算ふべく、其他三條實萬・大原重徳・澤宣嘉・錦小路頼徳・壬生基修等の公卿、島津久光・徳川齊昭・松平春嶽・山内容堂等の大藩主を始め金子教孝・清川八郎・兒島章臣・坂本龍馬・關遠・高杉晋作・武市半平太・戸田忠敬・長岡監物・蓮田市五郎・藤田東湖・藤本鐵石・松田範義・松尾たせ子・若江薫子・小林良典等詠出する所尠からず、就中忠烈・實美・季知・通禧等の如き、單に堂上歌人としても相當の地歩を占むべく、若夫れ玄瑞・象山・東雄・光平・國臣・曙覽・隆正等に至つては、高風吟懷専門歌人をして、後へに瞻若たらしむるものがあること、世間既に周知である。

(四)

叙上歌集其他の文書によりて之を檢るに、齊しく三十一文字の結成であつても、其構想修辭の上に利鈍あることは當然であるが、唯其思想の一致は、延て作歌上の着眼點を同一ならしめ其標的が最小部に集中せらるるの結果、志士の歌と言はば、茲に一種の形式をさへ生ずるに至つたことは、亦止むを得ざるところである。乍然彼の尋常歌會に於て、たとへば「朝鶯」「秋夕」の如き課題にて、同門同流の人々が出詠する場合と雖も、そこに種々の異巧あるに比し、志士等の所詠が、其郷土素養年配を異にし、時と場所と身境を異にせるに拘はらず、烈烈鏗鏘の歌詞歌調が、恰も一樣に符節を合はす如きものある所以は、實に其思想の自然統制の發露であつて、強て言はば、此暗合は即ち志士等結束の堅固を示現する、共同宣言の實ともなつたのである。今、各自の作歌中、花鳥風月の詠を除き、其動向一列一體なる、時事風吟の若干を擧げ之を對比して見よう。

(五)

志士等が一貫共通の精神の置きどころは、まづ皇室と國體の尊嚴であつた、世界に於ける特殊日本の貴重さであつた、彼等の信念はこの日本の直なる道を歩むにあつた。

皇神の誓ひおきたる國なれば直しき道のいかに絶ゆべき

松 陰

磯城島の直なる道を横かきの蟹はいかにかふみも知るべき

東 湖

尊かる天日嗣の廣き道踏まで狭き道ゆくな武士

曙 覽

直なる道はまた武士道であつた。

あづさ弓春の遊びのたはふれも踏な遣へそ武士の道

東 湖

武士の道な忘れそ月雪や花に酔ひふす夢ばかりにも

綏 猷

武士の道し整ふものならば寝てもさめても何か憂へむ

齊 昭

武士の臣のをとこはかかる世になに床の上に老果ぬべき

玄 瑞

心あれや人の母たるいましらよかからむことは武士の常

松 陰

武士道の一節には、名を惜んで生命を惜まぬことが約束されてある、國君のために深く散ること

とが本懐とされてある。

大君のためには何か惜からむ薩摩の迫門に身は沈むとも

月 照

君がため何か惜しまむ武士のありなし雲に我を見なせば

玄 瑞

八隅知君の國だに安からは身を捨つるとそ賤が本意なれ

松 陰

命だに惜しからなくに惜むべきものあらめやも皇のためには
魁けてまた魁けむ死出の山迷ひはせまじ皇の道

御代のためいかに盡さば足りぬらむ命は物の數ならぬ身を

白眞弓ひきなかへしそ大君のへにこそ死なめ益良雉のとも

數ならぬ身にはあれども願はくは錦の旗のもとに死にてむ

大君の御旗の下に死てこそ人とうまれし甲斐はありけれ

むかふ仇拂ひつくして國のため身をつくし路の露と消えまし

くづほれてよしや死ぬとも御陵の小笹分けつつ行かむとぞ思ふ

一身鴻毛の輕き、飛花落葉になぞらへたものは殊に多い。

櫻花散るてふことの世になくばめづる心もうとくやあらまし

折にあへば散るもめでたし山櫻めづるは花の盛りのみかは

櫻花早く亂れて散らざれば嵐の山と誰仰がまし

魁けて散りなむものは武士の道に匂へる花にぞありける

今日もまた櫻かさして武士の散るとも名をば残ささらめや

東	八	國	玄	國	綏	有	光	象	象	齊
雄	郎	臣	瑞	臣	猷	朋	平	山	山	昭

おくれなば梅も櫻におとりなむ魁てこそ色も香もあれ

龍田川流れに浮ぶ紅葉ばも散らではいかで人のめでせん

世の中をのどけき春にあはせむと散るは紅葉の心なりけり

散ればこそわけて紅葉のめでたけれ散らずばいつか春に逢ふべき

散りてこそ千とせの秋も色そはめ龍田の川に浮かぶ紅葉ば

朝に夕に、彼等の尊敬と仰慕の念は、ひたぶるに唯雲上へと馳せ向ふのである。

大君に仕へささぐる我心都の空に行かぬ日ぞなき

大君は如何にゐますと仰ぎ見ればたかまが原ぞ霞こめたる

久方の雲井はるかに君在せば心空なるわが思ひかな

千磐破神にめされて雲の上を常に思ひし夢にやあるらん

語るべき人しあらねば大君は雲居にひとりものおぼすらむ

秋の夜の晴れたる空の月見ても心にかゝる雲の上かな

わが君のすめる心になづらへて空にさやけき月を見るかな

あらし山吉野の花はいかにぞとみはしの櫻みそなはすらん

保 臣

齊 昭

草 臣

草 臣

玄 瑞

齊 昭

實 美

綏 猷

貞 至

國 臣

望 東

基 建

東 雄

東 雄

矛執りて守れ宮人九重の御階の櫻風そよぐなり

一日二日籠りゐてさへいぶせきを我大君はいかにますらむ

咲きにほふ花を見てだにしのぶかな雲居の風の今日はいかにと

山櫻みるにつけても大内の花をしぞ思ふ春雨の空

わが國の大官所かばかりにさび給ひぬと思ひかけきヤ

至尊の行幸を仰ぐ心

しづたまき數ならぬ身も大君のみゆきし聞かばみちはらひせむ

ときのまに荊からたち刈り除けてうもれし御世の道ひらきせむ

大君の御馬の口をとりなほし吉野の山に櫻狩りせむ

花見にと出でます御代の春ならば籠りをるとも嬉しからまし

春秋の行幸も絶えていたづらに匂ふ都の花紅葉かな

蝦夷島や千島のもとに舟うけて君し許さばをきなつりてむ

君恩のいや高きに感泣し、奉公の實を致さむと期しては

富士の山を十重も二十重もつみしより重きは君のめぐみなりけり

國臣

東雄

玄瑞

國臣

貞至

玄瑞

光平

玄瑞

東雄

國臣

象山

象

燕子

舟山
 舟山とすもさても
 遠く
 舟山とすもさても
 遠く

大君の深き恵みをうくる身は年の暮るるも知らずぞありける

久光

ながらへて赤き心をみがけただ君より給ふ米の数まで

たせ子

ふみ開く衣の袖はぬれにけり海より深き君がみこころ

龍馬

大内の山のみかまぎ樵りてだに仕へまほしき大君の邊に

國臣

うみの子のいや八十つづき大君に仕へまつれば楽しくもあるか

光平

攘夷と討幕に觸るるものは、更に激越の調を帯び来る。

八千矛の一筋毎にこゝだくの夷のかうべ貫きてまし

東潮

劍太刀佩く身樂しき世なりけりえみしが首を斬らむと思へば

綏猷

たまはりし君が御稜威の嚴粋いでとりもちて奴きためむ

光平

七たびも生きかへりつゝ夷をぞ攘はむ心吾忘れめや

出づる日の光輝く神國の入る日のえみし何恐るべき

千早振人の醜業かかると思へば我も髮逆立ちぬ

まつろはぬ奴ことごと東の間に燒き滅ぼさむ天の火もがも

外國船の來泊を憤ることろ

沈みつる其神風も懲りすまに又立よるか沖つしら波

君が世は巖とともに動かねばくだけてかへれ沖つしら波

鹿島瀉怒りて立たむ浪もがな人はうつきの十六夜の空

神風の伊勢の海邊に夷らをあら瀦たたしうち沈めばや

松陰

八郎

玄瑞

東雄

たせ子

光平

東湖

東湖